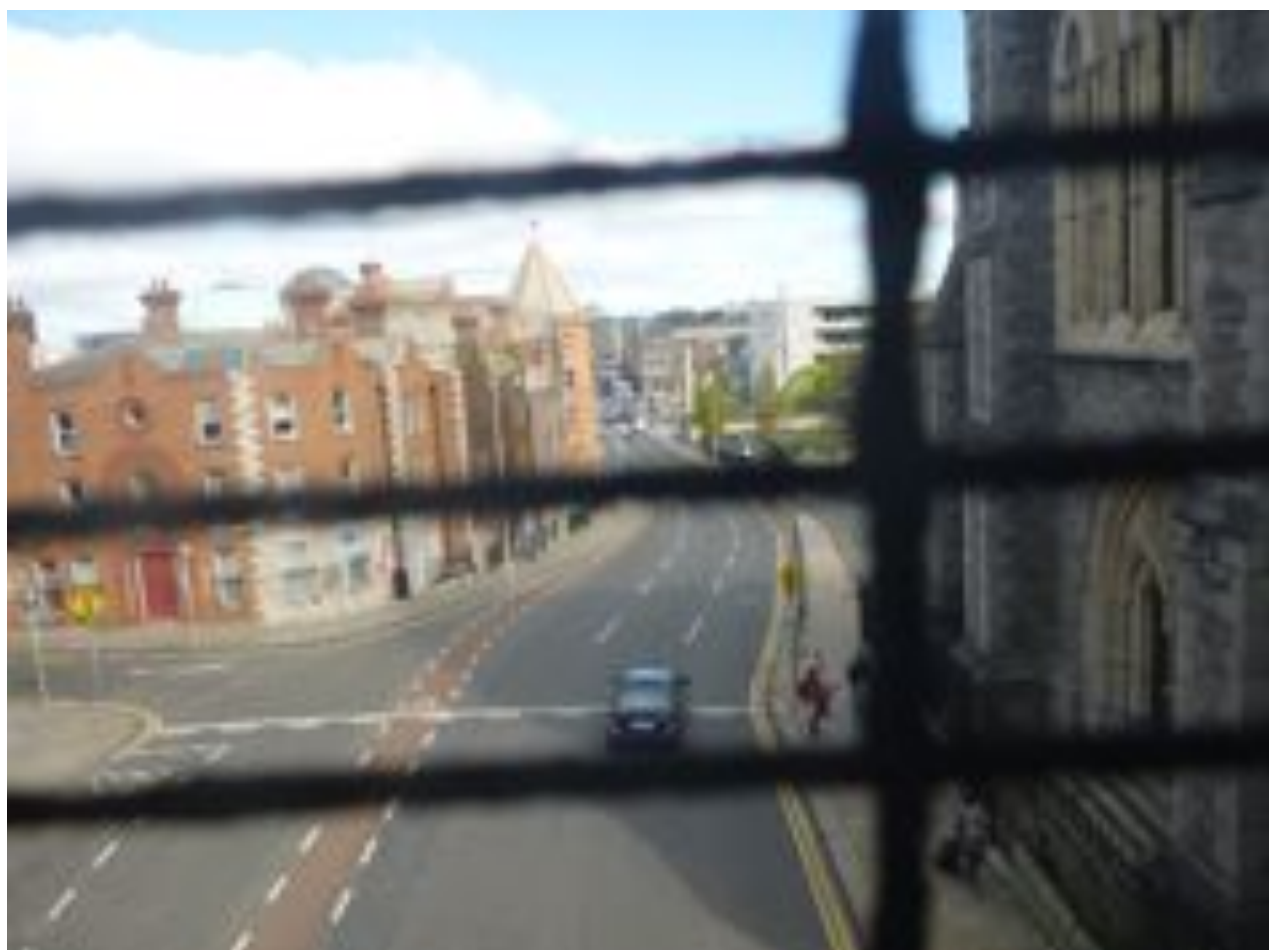


# PONTE

書くジャグリングの雑誌：「ポンテ」

通巻第7号



撮影者：青木直哉 於 ダブリン（2012） 今年のEJCはアイルランドです。

## 今号の記事

- 編集長近況
- ピザとジャグリングの架け橋 ポンテ ピザ職人たちのイタリア世界大会 そいそい
- ジャグリングエッセイのころみ（5）人はドロップからしか学ばない。 英語が話したい人へ 青木直哉
- 編集部より

編集長近況

右手のけががなかなか完治せず。痛い。しかし以前よりだいぶ軽くなった。ついジャグリングをしてしまう。慢性化しないと良いが、きつとするだろう。

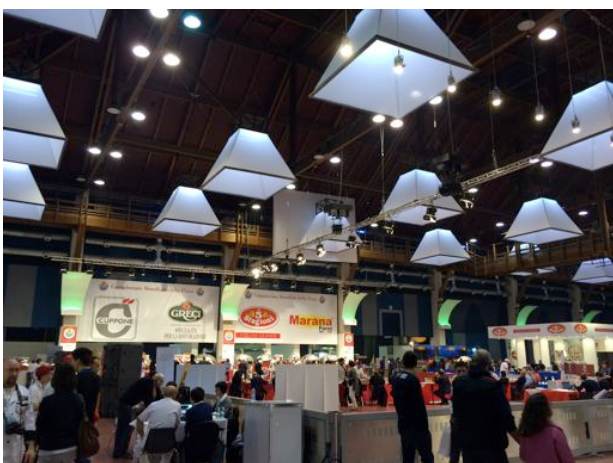
最近、自分が失敗する要因は「欲張り」が原因だということを胸に生きている。子供の頃目の前のことに集中できていたのは、「有るもの」だけを見ていたからかも。「有るかもしれないこと」にばかり目がいつてしまう今の、大人の自分は、集中力がない。

発刊1週間ほど前に、アメリカから来ていたサーカスアーティストのエリック・ベイツ、3日ほど前に、スウェーデンから来ていたエリック・オーベリ、各人インタビューを行う。6月の両国パフォーマンス学会よりも前を目安に、紙媒体で配布予定。

ポンテ  
ピザとジャグリングの架け橋  
ピザ職人たちのイタリア世界大会

そいそい

語学研修も兼ねたイタリア旅行の中、4月5日から9日にかけてパルマという都市に滞在してきた。パルマと言えば生ハムが素晴らしく美味しいところであるが、実はピザ好きにはたまらないイベントがここには一つある。ピザ職人たちによるピザの世界大会、Pizza World Show(イタリア語でCampionato mondiale della pizza)だ。



↑会場内の様子。

奥でピザ職人たちがコンペ用のピザを焼いている。

ジャグリングのことはのために

以前はピザの世界大会は体育館のようなこじんまりとした場所で行われていたが、昨年より面積の広い本会場に移ったことにより華やかさが随分増したように見える。上の写真はメインとなる会場のもので、奥で7~8組ほどのピザ職人たちがピッツァ・クラッシカという、味を競う部門のためのピザを焼き、手前側で審査員たちが職人たちの焼いたピザを一切れ食べて味を審査していく。この部門には例年300人超ものピザ職人たちが参加するので、審査員は休憩を挟みながら交代で味見をする。

ピザの世界大会にはおおまかに分けて料理とパフォーマンスの二つの部門がある。料理の部門では例えば上で紹介したピッツァ・クラッシカや、グルテン・フリーのピザの味を競う部門、ピザ職人と職人ではないシェフの二人でピザを作る部門、ピザではなくパスタを作る部門などがある。クラッシカの部門では上記のように大人数の職人たちがピザを焼き審査員も全部を食べることはできないので、余ったものは競技の参加者の判断で自分たちで食べるか、もしくは会場横のピザの切り分けブース近くにいる観客に提供することができる。もちろんタダで。



↑ブースでピザを切り分ける職人とブース近くの人

また、ピザを作る過程で、ピザのみならずデコレーションの美しさの演出に精を出すピザ職人も存在する。彼らの労作は下図のように、さながら美術館の絵画のように間近で見ることができる。

↓パンのような材質の車、奥は火山とプルチネッラ



ピザの世界大会のもう一つの大きな括り・パフォーマンス部門

では、次の三つがある—早伸ばし部門、大伸ばし部門、そしてピザ回し部門だ。早伸ばし部門では、既定の枚数の生地をいかに早く伸ばせるか、大伸ばし部門では制限時間の中でいかに生地を大きく伸ばせるかを競う。

さて、本題のピザ回し部門の説明に移ろう。

ピザ回し部門は予選と決勝の二つがあり、予選は三日ある世界大会の最初の二日で行う。決勝には二日ある予選の上位6人が進む。



↑ピザ回し部門予選の会場の様子

上の写真は予選のものである。見て分かる通り、四方を観客に囲まれ、ピザ職人はその中でパフォーマンスを行う。写真手前の二つのテーブルで参加者が本番用の小麦でできたピザ生地を準備し、三分以内を原則に演技。演技と演技の間の生地を準備している時間はMCが間を取り次ぐ。

参加選手はイタリア人が多数を占める中、母国で別の世界大会を抱えるアメリカからも数人、日本からは昨年同大会で二位になった立川巧さんと中島渉さんの二人が参加。様々な国から様々な参加者がやって来る世界大会はピザ回し界の同窓会としても機能しており、自分も去年イタリア留学中に知り合ったスペイン人のアントニオとは一年ぶりの再会を果たし、チェコで知り合った、自分の使っている練習用ラバーを作っているペトゥルという人とも話したり...とにかく知り合いだらけだ。これが実は世界大会で最も楽しみなところの一つでもある。

ピザ回しを観戦(?)してみると、様々な発見がある。たとえば、国籍によって演技の雰囲気微妙に違う。イタリアはピザ職人の学校にピザ回しコースがあり、そこでピザ回しを学ぶことが多いので、イタリア人のピザ回

しはみな独特のゆったりとした間を持っている。勝手な推測なのだが、ピザ職人の修行には師弟関係が深く関わっているのでは、ひょっとしたらその師弟関係をピザ回しにおいても引き継いでいるのかもしれない。それゆえにイタリア人のスタイルは昔からある『ピザ職人のピザ回し』の原風景の面影を思わせるものになったのかも...と想像してみる。

一方でアメリカ人のピザ回しはイタリア人のそれよりもより派手、というかピザ回し外の演出がやたら凝っている印象。チェコ人のペトゥルはまた独特なスタイルだし、スペイン人のアントニオもイタリア人のそれとは若干趣が違ふような気がする。そして日本人のピザ回しは...全体的に動きが早い。動きがダンス的で、体あつてのピザという感じが日本的な感じがする。

と、スタイルと国籍の相関については面白いのだが、一個一個の技自体は国籍問わずぼぼ様な印象を受けた。今まで見たこともない技、というのはあまり見受けられなかった。もっとも、小麦でできた生地を扱う以上、回すうちに伸びていくし、いくら丁寧に回していてもいつか破けるというリスクさと技の難易度とは折り合いをつけなければならないし、これは仕方のない事かもしれない。

予選を日本人の立川選手が一日目を一位で通過し、決勝戦に臨む一人として参加。決勝戦の結果はイタリア人のルカ・ランツァ選手が優勝、二位がアメリカ人のジャミー・カリトン（発音はこれでいいのかな?）、三位がスペインのアントニオということに。審査をみるに、ドロップの回数と周囲の観客の盛り上がり重要なように自分には思えた。

\*

ピザの世界大会を終えて、改めて『ピザ』という食べ物を持つ文化の広がり方の面白さを再認識させられた気がする。ピザは食べ物として美味しいだけでなく、回すことでエンターテインメントにも成り得るという本当に変で面白いものである。ピザ回しというのは競技人口も少ないし食べ物のピザに比べたらまだまだ若い文化で競技としてのピザ回しに関する問題もまだまだあるが、それだけにこれからもピザとの絆を保って技術や世界観を

より発展させられたらもっともっとすごくなるだろうな、  
とそんな可能性を感じた三日間だった。 ■

編集長の言葉

ビザ職人の学校にビザ回しのコースがある、というのは、実に興味深い。



## ジャグリングエッセイのこころみ(5)

## ひとはドロップからしか学ばない。

英語が話したい人へ

青木直哉

ことばの学習が好きで、いつでも鞆の中には文法書か単語帳がつっこんである。ただ単に好きだから。異国のことばに触れていると、落ち着くのだ。ちょうど、iPodをなんとなく鞆にいれておきたくなる感じと一緒にある。

趣味は、と聞かれると、大体「ジャグリングです」と答えるが、「語学です」と答えた方がいいような気がする。ジャグリングは、趣味と言うには「広がり」過ぎてしまった。雑誌を作ったりジャグリングのために旅に出たり、趣味、とって想像される幅を越え始めているようである。

ちなみに、英語は、出来ない人よりは出来るけれど、出来る人よりは出来ない。要するに中間レベル。筆者の周りは自然に流暢に英語を話せる人だらけなので、自分の英語には劣等感を感じている。だが一方日本のジャグラーの間だと、割と「英語ができる」部類に入ることになるので、少し居心地が良い。

ジャグリングとことばの学習には、似ている所がたくさんあると思う。

まず、色々な言葉のなかから自分の好きな言語を選んでそれを研究できる場所。ひとくちに外国語といっても、色々ある。大学で学べるものだけが外国語ではない。ベラルーシ語だってあるし、アゼルバイジャン語だってあるし、閩南語だってあるし、ラオス語だってあるし、コサ語だってある。ジャグリングなら、ポールやディアボロやデビルスティックやシンガーボックスや、はたまたあまり多くは見かけないが皿回しなどから自分にあったものを見つけて究めていくジャグリングに似ている。必ずしも「完璧にできるようになる」必要がないところも似ている。

たとえば筆者は、イタリア語を大学に入って真っ先に勉強して、ひととおり文法と話し方を勉強して会話と読書が出来るようにはなったが、それだけでは物足りなかつたので、アイルランド語、デンマーク語、アラビア語と、あんまり人が注目しなさそうな言語も勉強してみた。当ジャグリングのことばのために

時はなんだか虚栄心が強かったのである。今も強い。あまりはつきりとしたモチベーションがあったわけではないのでどの言語も身に付いてはいないが、でも無人島出身でサンタクロース似のおじいさんにアイルランド語を習ったり、今まで書いたことのない文字を書いてみたり、文字と発音がどう見ても一致しないことばで遊ぶのは、それなりに面白かった。その後、だんだん、割と「話されている」言語も一通り見てみたくなって、ロシア語、フランス語、スペイン語、中国語などもなんとなく覗いてみた。覗いただけなので、これといって役に立っているわけではない。頻繁に台湾に行くので、中国語は若干使えるレベルにはなった。他はいまだに挨拶と自己紹介くらいしかできない。今は、チェコ語とドイツ語をやっている。

ジャグリングに関してもそんなもので、ディアボロとポールが主たる道具だが、デビルスティックやシンガーボックスなどの「浅い引き出し」も多い。

さて、曲がりなりにも色々な言語に触れていると、「ことばって、どうやって勉強したらいいのか」と時々聞かれる。別に私自身雑多な言語を話せたり読めたりするわけではないのだが、「語学の人」のイメージがどうもついているようで、自然そういう話題になることが多い。それと、「英語」を話せるようになりたいという声もよく聞く。

EJCやIJAやその他外国のコンベンションに行きたいと思ったら、まずは英語を自由に使えれば、楽しさが倍増することは間違いない。これは筆者の実体験である。EJCなら、開催地で使用されている言語を使えれば、さらに愉快であることは間違いない。ただの見る/見られるという関係だけではなくて、冗談を言って笑いあったり、時にはケンカしたりという関係になれる。「ガイジン」から一歩進んだ目で「人」と付き合えるようになる。外国語が使えると、楽しいことはいっぱいある。

そこで、ことばを勉強するには、いったいどういうプロセスで身につけているのか、ということを考えてみる。いったいどこから考えたら良いか分からないが、なんとなくつらつらと文章を書いていると、何か見つかるような気がする。

まず、ジャグリングの技を身につける感じと、単語や文法を身につける感じ、この二つは、非常に似ている。どういうところが。

文法書は、ジャグリングでいえば「ボールジャグリング入門」などの教本や、YOUTUBEやDVDの形で手に入る、チュートリアルに当たる。そこには、今存在する、その分野での「あり得ること」が書かれている。だが、それを身につけるには、自分で練習しないと何も始まらない。文法も、例文があつて、解説があつて、さらにたくさんさんの練習問題があつて、その練習問題を飽きるほど解くことで、だんだんと法則が勝手に身に付いて来る。ただ眺めているだけで身に付くようなことではない。これが結構ミソで、語学は、スポーツだと思った方が良い。本をたくさん読んだら話せるようになるのではなくて、

(本を読むことはおおいに言語学習を助けるが) 話したいのなら、飽きるほど話さなくてはならない。「自分がしたいこと」を、そっくりそのまま、何度もシミュレーションするしかない。お手本に沿って、間違えながら、覚えていく。最初は、なんにもうまくいかないが、それでいい。間違えながら進むことが全てなのだ。ジャグリングなら、何度も何度もボールを落とすことこそが大事だ。そして、皆さん、練習の時間のほとんどは、ドロップに費やされている。

ドロップがいかにジャグリングを上手くするか、という事は肝要だ。むしろ、ドロップをせずにジャグリングが上手くなる人はいない。単純な事実だが、これが実に面白い。人は、失敗からしか学べない。

ジャグリングを練習して来た日々を振り返ってみよう。初めて、どこかでジャグリングを見る。自分もできるようになりたい、と思って、出来る人に教を請う。自分で情報を探す。始めはもちろん、できない。できないし、こんなことが、練習して可能になるのだろうか、という気分を拭えない。なにせ、飛び交う3つのボール。手の本数以上。ミルズメスを見れば、なぜ複雑な軌道を描くボールが全部手元に戻ってくるのか理解出来ない。4ボールファウンテンの軌道が、交差していないことすら知らなかった時代、覚えてますか。5つのカスケードなど、目で追うだけでも精一杯。それ、何個ですか。だが、一度ジャグリングを「やりたい」と思ったら、その熱い動

機を胸に、一心に頑張るしかない。とにかく、見本の通りにやって、自分なりに上手くいく方法を探りながら、一歩ずつ正解に近づけていくしかない。そこに近道はない。ドロップを5000回くらい繰り返した所で、ようやくひとつの技ができるようになる。どんな技も、この原則だけは変わらない。これが誇張ではないことは、ジャグラーならば当然分かるだろう。途方もない努力である。だからこそ、人に感慨を与えるし、自分でも達成感がある。努力で何とかなるものだと思えないから、傍から見ると、ジャグリングは才能を必要とする、と思われる。ジャグリングは、素人からしたら、とても練習で習得できるようなものとは思えない。きっと今は忘れているかもしれないが、ジャグリングに熟達した読者の方々も、昔を思い出せば、そういう時があったはずである。

いきなり、5ボールができるようになりたいな、と思つたとする。無論、不可能である。見よう見まねでとりあえずボール5つを持って頑張って投げても、絶望が待っているだけである。まずは3つでいくつか技が出来て、それも滑らかに、ある程度続くようでない、と、まず5個には入れない。しかも5個を練習するようになったからといって、すぐにできるわけではない。継続した練習がなければ、いつまでたつても身に付かない。

じゃあ、なんで5ボールカスケードがすこしでも出来る人は、そんな米粒の数を数え上げるような努力をやつてのけられたのか。

それは、その習得するプロセスそのものに、喜びを見出していたからである。つまり身体を動かして、ボールが飛び交う様を見るのが楽しかったからである。あとは、「もう少し練習すれば、必ずできるようになること」にだけ集中して、ひたすら挑戦し続けたからである。

だからことばの話に戻して、たとえば英語を身につけよう、と思つたとすれば、いきなり「流暢に話せるようになろう」などと考えては、3日でがっかりするだけだ。まずは、「英語で楽しくなろう」と考えなくてはいけない。落ち着いて、「英語で楽しいこと」を見つける。チェコ語なら、「チェコ語で楽しいこと」を見つける。中国語なら、「中国語で楽しいこと」を見つける。

ことばの習得には時間がかかる。そして、ことばの学習のプロセスとは、ひとつひとつの「技ができるように

なること」、すなわち、ひとつひとつの語と、その語同士の結びつき方を、「いつでも確実に使えるようになる」ように練習するというプロセス以外の何でもない。「キリがないな」とイヤになる方もいるだろうか。そりゃそうである。ことばの学習には、キリがない。

だがこういう、一見するとどう考えてもうんざりしそうなことを、ジャグラーは、ジャグリングだったら、ひとりひとり、ちゃんとやってのけているのである。今3つディアボロを回せる人は、考えてもみて欲しい。自分がどれだけディアボロを回し、落としか。どれだけ、出来る人の3ディアボロを観察し、分析し、自分のものどどこが違うのか、徹底的に確かめてきたか。そして誰もが、最初はたった一個のディアボロを高く投げ上げて喜んでた。ここにも、近道はなかったはずである。ただ、「やりたい」という思いだけをたよりに、ひたすら正解が自然と出てくるようになるまで、ディアボロを落とし続けただけである。だから別に、人と違うメソッドを使ったわけではない。ただ、ディアボロを回して、できない技を試すという行為を繰り返しただけ。できないことを、「できない、できない」と言いながら繰り返す。ただそれだけである。ジャグリングを人前で見せるような人は、多かれ少なかれこういう経験をしてきたはずなのである。

だから、失敗を繰り返していれば、いつかは必ず正解を自然に出せるようになる、ということは、ジャグラーなら誰もが知っている。

口で「失敗は成功のもと」と言っても大した説得力はないが、少なくともジャグラーは、そのことを自ら日々実行しているのである。ことばの勉強に絶望してしまったら、ジャグリングのことを思い出せばいい。だって、カスケードから始めるしかないじゃないか。「上手い」というのは、「身体を動かす」ことを楽しんだ末の結果である。決して、「上手くなるために必須の方法」があったわけではない。自然な失敗の反復の結果である。

何かを身につけるということは、ただひたすら、見本の通りにやってみて、上手くいくまで繰り返す、ひたすら「失敗する」というそれだけの行為なのであった。楽しもうと思うから辛くなる。楽をせずにただやるだけだ、と思っていれば、かえって続けられる。

ことばも同じで、楽をせずに、「自然にできるようになるまで間違える」のがいいのだろう。何も考えなくていい。ただ、間違えていさえすればいい。そうやって間違えても間違えてもまだ立ち直るには、「できる」ことを喜ぶよりは、「できない」ことをこそ喜ぶのが良い。それこそが、「好きこそもの上手なれ」の真髄であるとも思う。 ■

## 編集部より

現在、編集部は三人体制で動いています。時々、集まって今後のことを話しています。

しばらく隔週発行で様子を見てきたポンテですが、次号以降月一回発行となります。

月一発行にする分、一回の分量を増やして、内容の拡充をする目論みです。でもまた隔週に戻すかも。実験です。

## 記事募集のお知らせ

寄稿を受け付けています。基本的にはこちらから声をかける場合が多いですが、「こんなものを書きたいぞ」という相談から、「こんなものを書いたぞ」という、引き返しの出来ない挑戦まで、下記のアドレスに連絡をどうぞ。次号発刊は6月5日（木）寄稿締め切りは前月末の5月31日（土）23:59まで。 ■

[jugglerna@gmail.com](mailto:jugglerna@gmail.com)

ponte 編集長 青木直哉

ポンテは公式サイトでご覧になれます。

書くジャグリングの雑誌：ponte

<http://jugglingponte.tumblr.com>